

安積疏水

福島県耶麻郡猪苗代町～郡山市
JR東北新幹線「郡山駅」からバスで15分

資料提供: 1.10-12.国立公文書館
出典: 2.『大久保利通文書 九』 3.『明治以後本邦土木と外人』 4.7-9.『土木人物事典』 5.6.15.16.『安積疏水志 天』 撮影: 13.14.知野泰明

安積疏水の概略

安積疏水とは明治初頭に殖産興業と士族授産政策の一環として計画された三大疏水事業の一つ。近世まで用水不足の安積原野(現在の福島県郡山市)を開拓すべく、その水が猪苗代湖に求められ、導水のために奥羽山脈を貫く疏水計画が実施された(当初、猪苗代湖疏水と称された)。明治12(1879)年起工、明治15(1882)年竣工。完成当時の幹線水路延長52km、分水路78km、トンネル37箇所。計画推進者としては内務卿・大久保利通が、技術顧問として御雇いオランダ人工師・ファン・ドールンが設計に参画し

ている。しかし、ドールンが設計の中心となった野蒜築港とは異なり、日本人による発案、かつ測量や設計などへの関与がかなりの部分を占めた。

安積疏水は郡山市発展の原動力となり、現在でも水の供給で重要な役割を果たしている。また、郡山市街地を流れる疏水水路の末端部は、今日、排水路として利用されているが、一部が近年「せせらぎこみち」と名して親水空間として整備された。

安積疏水の疏水システム

猪苗代湖の自然流出口は湖北西端の日橋川であり、阿賀川に合流、その後、新潟県に入って阿賀野川となり日本海へ注ぐ。また、近世以来、猪苗代湖の日橋川流出口の左右岸は戸ノ口堰、布藤堰など灌漑用水の取水口ともなっていた。こうした状況にあって安積疏水の確保には既得水利権への影響を避けねばならなかった。そこで考えられたのが日橋川流出口の十六橋地点の河床を掘下げ、かつ、そこに水門が建設されたのである。これが十六橋の水門で、このダム効果による猪苗代湖の水位上昇により、安積疏水の流量が確保された。安積疏水の取水口は湖北東端の山潟に作られ、勾配利用による自然流入が行われた。

安積疏水は取水後、新設水路を東流し奥羽山脈を抜けると一旦、五百川に流下された。その後、熱海地点の玉川堰で左岸に取水され、五百川に掛けられた熱海疏水橋(めがね石橋)によって横断し、右岸の安積原野へ通水された。

その後、明治21(1888)年の磐梯山噴火による減水問題などを経て、大正3(1914)年に十六橋水門は電動巻上げ式へと改築された。さらに昭和15(1940)年には発電力増強のための水量確保で湖面低下となり山潟側の自然取水がポンプ取水となった。その後、郡山から南の須賀川方面への灌漑を目的に新安積疏水が実施され、この分の流量規模の変化により、山潟より西の上戸に取水水門が新設された。現在の流路はこの水門から山間部の水路トンネルを通り、新安積疏水(昭和40(1965)年事業完了)への地下分水後、五百川へ流出する。その際の流水の一部は明治31(1898)年に建設された沼上発電所の発電にも使用されている。この発電所の開業は郡山までの24kmという長距離送電の草分けともなった。

掲載した図面は、猪苗代湖と共に安積平原に水路線が赤く記載された工事全図と、初代十六橋、熱海疏水橋など明治初頭の建設当時に記録した図面である。(知野 泰明)



7.南一郎平



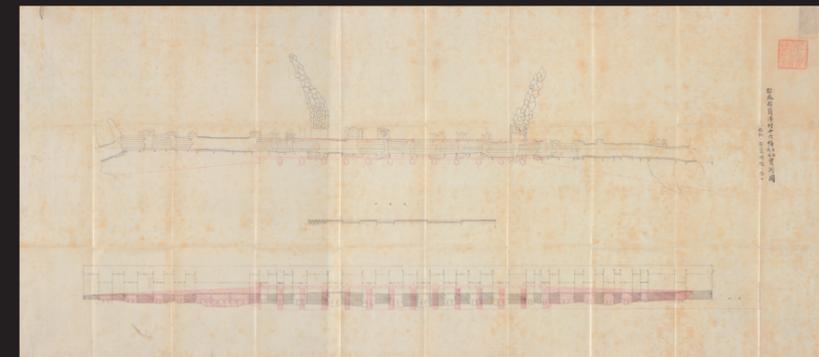
8.山田寅吉



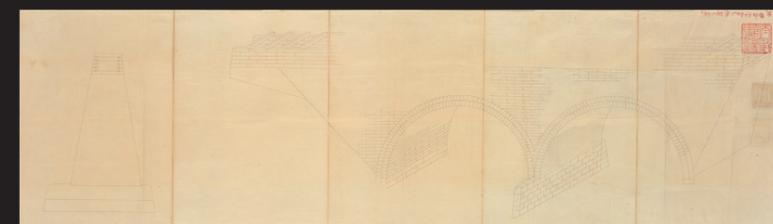
9.奈良原繁



1.猪苗代湖疏水工場全図



10.耶麻郡翁沢村十六橋平面断面実測図



11.安達郡高田村の内熱海土橋疏水掛樋ノ図



12.戸ノ口十六橋ノ図



2.大久保利通



3.ファン・ドールン



4.三島通庸



5.山潟渠口(猪苗代湖の疏水取水口)



6.沼上露天瀑(奥羽山脈を抜け一旦、五百川を流下する)



13.疏水水路



14.現在の安積疏水十六橋水門



15.旧十六橋



16.旧熱海疏水橋